

黙示録における啓示の形態

—黙示録の序言（1:1～3）の解釈と翻訳—

遠 藤 勝 信

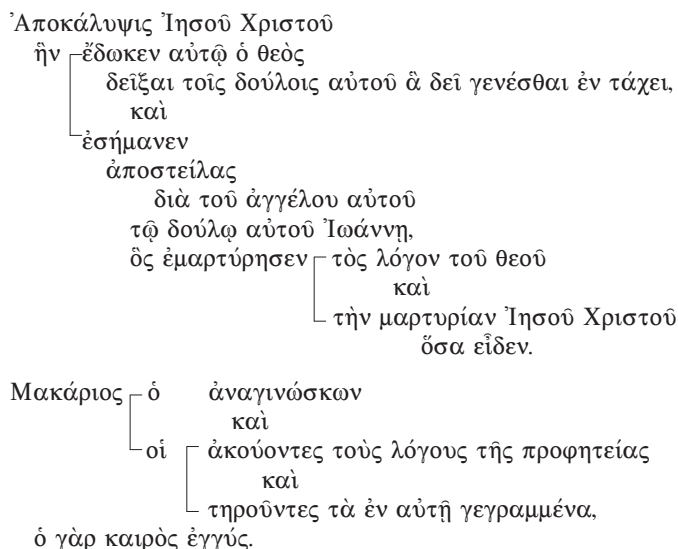
はじめに

「ヨハネの黙示録」は、原語（ギリシア語）の本文確定とともに¹、その翻訳と解釈には未確定要素が多い。特に、冒頭節（1:1）にギリシア語文法上の問題があり翻訳者たちを悩ませてきた。新共同訳聖書では当該箇所の問題に目を瞑り、意識で解決を図っている。本論文ではその問題と向き合いつつ、新たな翻訳の提案を試みる。その上で、序言（1:1～3）全体を通してヨハネは啓示をどのように理解していたのかを考察する。

¹ 新約聖書のギリシア語本文に関心が向けられるようになったのは二千年のキリスト教会史を慮れば然程昔のことではない。それはヴルガタ（4世紀のヒエロニムスによるラテン語訳聖書）の読みに、カトリック教会の恣意性を疑った人文学者エラスムスから始まり、宗教改革者ルターに受け継がれることとなったギリシア語新約聖書本文への回帰運動に端を発する。以後500年にも及ぶ作業の集大成として今日の国際聖書協会第4版（1994年）、及びネストレ第28版（2012年）がある。19世紀末から20世紀後半までに有力写本の発見が相次ぎ、今日では5700にも及ぶ写本が閲覧可能となり、その膨大な資料を扱うための様々な編集方針が立てられてきたのだが、改訂作業は未だ継続中である。2030年には Institut für Neutestamentliche Textforschung と International Greek New Testament Project が共同で新校訂本（*Editio Critica Maior*）を出版する予定である。殊にヨハネの黙示録の場合、現在までに発見されたギリシア語写本が他の書に比べて圧倒的に少ない。ギリシア語本文批評において重視されるパピルス写本（写字の年代が古く且つ文法的に安定したアレクサンドリア系の写本）で当該箇所を含んだものはひとつもなく、ヴァチカン写本（4世紀）においてはヨハネの黙示録そのものを含まない。大文字写本で有力写本はシナイ写本（4世紀）のみである。アレクサンドリア写本（5世紀）とエフライム写本（5世紀）によるヨハネの黙示録のテキストの信頼性は高くない。それ故ネストレ28版ではシナイ写本に基づきながら、写字年代が13世紀以降となる2053と2062とにかなり拠った編集となっている。

1. 文章構造

ヨハネの黙示録は、緻密に編まれた構造を持っている²。そのうち1章が序文としての役割を果たす³。さらに、序文は主題の流れ及び文学構造の視点から、「前書き（1:1～3）」、「挨拶（1:4～8）」、「啓示者イエスの顕現とヨハネの召命（1:9～20）」とに分けられる。1～3節のギリシャ語本文の構造分析は以下のとおりである。



1～2節は、先行する文の主語もしくは目的語が関係代名詞によって受け継がれ、神（与えた）→キリスト（御使いを介して示した）→ヨハネ（証言した）というように、「啓示の連鎖」⁴が強調される構成となっている。

² Cf. R. Bauckham, *The Theology of the Book of Revelation* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1993).

³ 1551年出版のステファヌス第4版新約聖書本文に初めて章節区分が付されたが、1～20節までを1章内に納めたのはそのためであろう。

⁴ Cf. ボーリング『ヨハネの黙示録』（日本基督教団出版局、1994年、*Revelation: Interpretation A Bible Commentary for Teaching and Preaching* (Louisville: West-

キリストの 黙示 (Ἀποκάλυψις)

↓

これを 神は キリストに与え (ἔδωκεν)

↓

彼は (御使い [ἄγγελος] を介し)

ヨハネに示し (ἐσήμανεν)

↓

彼は証言した (ἐμαρτύρησεν)

3 節にある三つの分詞節のうち、最初の二つ (ὁ ἀναγινώσκων [朗読する人] と οἱ ἀκούοντες [聴く人々]) は同じ目的語 (τοὺς λόγους τῆς προφητείας [預言のことば]) を共有することで、預言のことばの「朗読者 (単数)」と「聴衆 (複数)」とを対照させている。一方、後者の οἱ ἀκούοντες (聴衆) は、後続する三つ目の分詞節 τηροῦντες (守る人々) と冠詞を共有することで (Granville Sharp's rule: 冠詞+名詞 A+καὶ+名詞 B [無冠詞] ⇒ 名詞 A=名詞 B)、「聴くこと (ἀγούω)」と「守ること (τηρέω)」とを対照させていると言える。それを翻訳に生かせば、「預言のことばを朗読する人、聴いて守る人々は幸いである」となる。

朗読する人 (ὁ ἀναγινώσκων)

聴く人々 (οἱ ἀκούοντες)

守る人々 (τηροῦντες)

預言のことばを [複数]

(τοὺς λόγους τῆς προφητείας)

2. 黙示 (Ἀποκάλυψις) について

「黙示 (Ἀποκάλυψις)」⁵ と冠される文書は、旧約聖書及び第二神殿期ユダヤ教文書においては極めて希である。「第三パルク書」、「パウロの黙示録」等に観られるが、執筆年代は第二神殿期以降とするのが通説である。ἀποκάλυψις という用語そのものは新約聖書に当該箇所以外に 17 回出てくる。その用法として、第一に、終末に期待される神のさばきとしての義の現れ (ロマ 2:5)、キリストの再臨 (ロマ 8:19、I コリ 1:7、II テサ 1:7、I ペト 1:13; 4:13) を内容とする啓示を指す場合、第二に、異言や預言に並ぶ啓示の一形態として理解される場合もある (I コリ 14:26～32)。特に、I コリント 14 章の文脈においては、「黙示 (ἀποκάλυψις)」は、異言 (γλῶσσα) や預言 (προφήτης) と比べて、格段高い扱いとなっている。

異言：多くても 3 人で、しかも順番に。解き明かしを必要としている。

預言：2 人か 3 人が話し、他の人が吟味しなければならない。

黙示：黙示が与えられた人がいれば、他は沈黙しなければならない。

また、それはある種の霊的体験を伴うものであった (II コリ 12:1～4、ガラ 1:12、2:2)。第三に、旧約聖書から展望した終末の出来義の成就 (即ち、原始教会においては過去の出来事) を指す場合もある (ルカ 2:32、ロマ 16:25)。黙示録 1 章 1 節では、「これからすぐに起こるべきこと (将来)」とあるが、1 章 19 節においてヨハネに書き記すよう命じられたことは「今ある事、この後に起こる事」とあるように、黙示録における ἀποκάλυψις (黙示) は、「将来」という意味での「終末」のみならず、すでに終末を迎え

⁵ 表題として、「預言者 (θεολόγος [古代教父がヨハネに与えた呼称、「神学者」というニュアンスであるより、「神の言葉を語る者」の意]) ヨハネによる」(1006、1841、2329、2351、㉓)、「預言者であり福音者による」(046、1611)、「聖ヨハネ、使徒であり預言者による (2050)」と付されたものがあるが、有力写本には観られない。信頼出来る写本の読みは、「イエス・キリストの黙示 (ἀποκαλυψις Ἰησοῦ Χριστοῦ)」で始まる。

ているという意味での「今の事柄」をもその内容としている。

この黙示 (ἀποκάλυψις) は、神がイエス・キリストに与えたものであることが明記されている。「神が (ὁ θεός)」という主語の明示と、「与える (δίδωμι)」という動詞は、いずれも神の主権性とキリストの仲保者としての役割を示している。属格 Ἰησοῦ Χριστοῦ (「イエス・キリストの」) は、「イエス・キリストが与える黙示 (主格 [subjective genitive])」もしくは「イエス・キリストからの黙示 (起源 [genitive of source])」の意であり、それを Beale のように「イエス・キリストを示す黙示 (目的 [objective genitive])」の意も含む ([完全属格] plenary genitive)⁶ と取ることには難がある⁷。文脈におけるキリストは、啓示の対象であるより、仲介者としての役割を担う。ἀποκάλυψις (黙示) の原意は、「覆われていたものを引き剥がす (ἀπο+καλύπτω)」であり、それは、七つの封印で封じられて誰も開くことができない巻物を解くキリストの役割 (黙示 5:1~5) とも重なる。

その一方で、キリストは神から託された啓示のこトバを御使い (ἄγγελος) を介してヨハネに示される。

3. 文法的問題

しかし序言で述べたように、ここに文法的問題がある。ギリシャ語本文では καὶ ἐσήμανεν ἀποστείλας διὰ τοῦ ἀγγέλου αὐτοῦ τῷ δούλῳ αὐτοῦ Ἰωάννῃ (直訳では「彼の使いを介して、そのしもべヨハネに送って示した」) となっており、分詞 ἀποστείλας (原型 ἀποστέλλω 「送る」) に目的語がない。黙示録 22 章 6 節では、ἀπέστειλεν τὸν ἄγγελον αὐτοῦ δεῖξαι τοῖς δούλοις αὐτοῦ ἃ δεῖ γενέσθαι ἐν τάχει (「[主が]、その天使を送って、すぐにも起こるはずのことを、ご自分の僕たちに示されたのである」)

⁶ Cf. D. Wallace, *Greek Grammar Beyond the Basics: An Exegetical Syntax of the New Testament* (Grand Rapids: Zondervan), 119.

⁷ G. Beale, *The Book of Revelation*. (NIGTC; Grand Rapids: Eerdmans, 1999), 183; J. L. Resseguie, *Revelation of John: A Narrative Commentary* (Grand Rapids: Baker Academic, 2009), 62.

と、御使い (τὸν ἄγγελον) が目的語として明示されている。ところが当該箇所においては、ἄγγελος は目的語としてではなく、「御使いを介して (διὰ τοῦ ἄγγελου αὐτοῦ)」とあるように、「遣わされる対象」としてではなく、仲保者として描かれる。

ἀποστέλλω (遣わす) という動詞 (130 の用例) が目的語を取らないか、もしくは文脈がそれを暗示しないケースを新約聖書に探すも、当該箇所を除いてヨハネによる福音書 11 章 3 節のみである。

ἀπέστειλαν οὖν αἱ ἀδελφαὶ πρὸς αὐτὸν λέγουσαι

「そこで姉妹たちはイエスのもとに遣わして言った。」

この場合、ἀποστέλλω は目的語を明記しないが、文脈から「使い」が遣わされたことが読み取れる。別の見方をすれば、動詞 ἀποστέλλω に「使いを」という目的語が含意されているということになる。いずれにしても、ἀποστέλλω が目的語を取らない用例はヨハネの黙示録 1 章 1 節とヨハネによる福音書 11 章 3 節のみで、希な表現と言える。

佐竹は、サムエル記下 12 章 25 節、וַיִּשְׁלַח בִּיד נָתָן הַנָּבִיא (「預言者ナタンを通してそのことを示されたので」[新共同訳]) を例に挙げ、この場合の「בִּיד (「～によって」) は『を』と訳す以外に致し方ない」とする⁸。しかし、サムエル記下 12 章 25 節を「預言者ナタンによって『言葉 (もしくはメッセージ)』を送り」と訳するものもある (NKJV, ESV, NIV, etc.)。それは、שָׁלַח (「送る」) には、「メッセージを」という目的語が含意されるという理解に基づくからであろう。

箴言 26 章 6 節では、שָׁלַח דְּבָרִים בִּיד־כְּסִיל (「愚か者に物事を託して送る者は」[新共同訳]) というように、שָׁלַח と בִּיד (「～によって」) の間に目的語 דְּבָרִים (言葉 [複数形]) が置かれている。七十人訳聖書では בִּיד־כְּסִיל (「愚

⁸ 佐竹明『ヨハネの黙示録 (上)』(新教出版社、2009 年) 37 頁。

か者の手によって」)を翻訳するとき、δι' ἀγγέλου ἄφρονος (「愚かな御使いを介して」)とし、ヘブライ語にはない目的語 ἀγγέλος (使い) という仲保者的存在を補っていることは興味深い。

逆に、歴代誌下 36 章 15 節では、בִּיד מַלְאכֵי יְיָ (御使いによって) を、七十人訳 (紀元前 3 世紀にヘブライ語からギリシア語に翻訳された聖書) の訳者は、「ἀποστέλλων τοὺς ἀγγέλους αὐτοῦ (「御使いを使わして」) と、目的語に取っている⁹。詩編 78 篇 49 節では、יְשַׁלְּחֵם...מַלְאכֵי רַעִים (「災いの御使いの群れを…送られた」) を、ἀποστολὴν δι' ἀγγέλων πονηρῶν (「災いの御使いを介して」) と、מַלְאכֵי רַעִים (「災いの御使いを」) を、δι' ἀγγέλου (「御使いによって」) と、仲保者として翻訳している。ここに、ヘブライ語 שַׁלַּח とギリシア語 ἀποστέλλω の概念領域の違いが現れているとも言える。

最新のヘブライ語辞書¹⁰では、שַׁלַּח の用例として、目的語省略 (ellipsis) のケースがあることを紹介している¹¹。但し、そこに挙げられた用例には、文脈上目的語が明確に想定されるケースが殆どで (e.g. エレ 7:25、25:4、26:5、29:19、35:15、44:4、詩編 57:4)、当該箇所のように、שַׁלַּח の動詞の特性に関連するものは、上述した歴代誌下 36 章 15 節に加え、以下のケースのみである。

出エジプト 4:13

וַיֹּאמֶר בִּי אֲדֹנִי שְׁלַח־נָא בִיד־תְּשַׁלַּח

「モーセは、なおも言った。『主よ。遣わしてください。あなたが遣わす誰か

⁹ 新共同訳もそのように訳しているが、英訳聖書 (cf. ESV) ではヘブライ語聖書を忠実に翻訳している。

¹⁰ D. Clines (eds.), *The Dictionary of Classical Hebrew*, vol. VIII (Scheffield: Sheffield Phoenix Press, 2011).

¹¹ ヘブライ語文法における ellipsis については以下の文法書を参照: P. Joüon, *A Grammar of Biblical Hebrew* (Roma, Editrice Pontificio Istituto Biblico), 1991; E. Kautzsch, *Gesenius' Hebrew Grammar* (2nd ed.). (Oxford: Clarendon Press), 1985; R. Williams, *Hebrew Syntax: An Outline* (2nd ed.). (Tronto: University of Toronto Press), 1982.。但し שַׁלַּח という語の特性との関係で論じられる解説はない。

の手によって』(私訳)¹² ⇒ 「使者」もしくは「ことば」が省略

サムエル記下 22:17

יִשְׁלַח מִמָּרוֹם יְקֹחֵנִי יְמִשְׁנִי מִמַּיִם רַבִּים

「(主は) 高い天から遣わし (もしくは伸ばし)、大水の中から取り上げてくださった(私訳)¹³ ⇒ 「救いの手」もしくは「救い」が省略

エレミヤ書 23:38

וְאֶשְׁלַח אֵלֵיכֶם לְאֹמֶר

「わたしはあなたがたがに遣わし、こう言う。…(私訳)¹⁴ ⇒ 「ことば」もしくは、「預言者?」が省略。

エレミヤ書 25:9

הֲנִי שֹׁלַח וּלְקַחְתִּי אֶת־כָּל־מְשַׁפְחוֹת צִפּוֹן נְאֻם־יְהוָה

「『見よ、わたしは遣わし、すべての北の諸民族を取る』と主は言われる」(私訳)¹⁵ ⇒ 「使者」もしくは「ネブカドレツアル」が含意。

エレミヤ書 43:10

הֲנִי שֹׁלַח וּלְקַחְתִּי אֶת־נְבוּכַדְרֶאצַּר מֶלֶךְ־בָּבֶל עִבְרִי

「見よ、わたしは遣わして、バビロンの王、わたしのしもべであるネブカドレツアルを取り…(私訳) ⇒ 「使者」もしくは、「招きのことば?」

これらの場合、שֹׁלַח の「遣わす」という行為に焦点が置かれ、「遣わされる対象(使者、もしくは言葉)」が省略されるも、含意されていることが分かる。一方、ギリシア語の ἀποστέλλω には同様の理解はないのだが、ヨハネ

¹² 新共同訳「だれかほかの人を見つめてお遣わしてください」と意訳。

¹³ 新共同訳「主は高い天から御手を伸ばしてわたしをとらえ」と意訳。

¹⁴ 新共同訳「～と命じておいたのに」と意訳。

¹⁵ 新共同訳は「わたしの僕バビロンの王ネブカドレツアルに命じて」。

の黙示録の著者の背後にはヘブライ語（もしくは語源を同じくするアラム語）の背景があるため、ἀποστέλλω にヘブライ語の פָּרַשׁ の用法が投影されたと考えられる。ユダヤ教文書の I エズラ記 1 章 48 節にも καὶ ἀπέστειλεν ὁ θεὸς τῶν πατέρων αὐτῶν διὰ τοῦ ἀγγέλου αὐτοῦ μετακαλέσαι αὐτοῦς（「彼らの先祖の神は、ご自分の使いを介して彼らを召された」）と、黙示録 1 章 1 節に類似する構文が観られる。

これらのことから、黙示録 1 章 1 節の ἀποστείλας διὰ τοῦ ἀγγέλου αὐτοῦ の背後には、ヘブライ語の פָּרַשׁ פָּרַשׁ（「～を介してメッセージを送る」）の構文があり、その場合の פָּרַשׁ は「使いを派遣する」の意と、使いを通して「メッセージを送る」の両義を含意していると解すべきであろう。黙示録 22 章 6 節の文脈では、「御使い派遣」に焦点が合わされているため、ἀγγέλος が対格で言い表され、1 章 1 節では、御使いの「仲保者的役割」に焦点が向けられているため、διὰ τοῦ ἀγγέλου αὐτοῦ と記されたのではないか。そのニュアンスの違いを無視して、新共同訳をはじめ多くの邦訳聖書が取る意訳「キリストは御使いを遣わして」ではなく、「キリストは御使いを介してみことば（もしくはメッセージ）を送り」という訳を提案したい¹⁶。

4. 黙示の内容

この黙示は「そのしもべたちに」示される。「その（αὐτοῦ）」とは、「神」とも「キリスト」とも取れる（cf. 「キリストのしもべ」[1 コリ 4:1、II コリ 11:23、ガラ 1:10、ヤコブ 1:1、II ペト 1:1、ユダ 1]；「神のしもべ」[使徒 16:17、テト 1:1、黙示 7:3、19:5]）が、文の主語は「神」であり、「神のしもべたち」と取るのが自然である。一方、後続する並行文の主語はキリストと解されるため（本文では主語は省略）、「そのしもべヨハネに（τῷ δοῦλῳ αὐτοῦ Ἰωάννῃ）」の方の αὐτός はキリストを指すとも考えられる。黙

¹⁶ 同様の翻訳は以下の通り：NRSV, NKJV, ESV, NIV, etc., N.T. Wright, *Revelation for Everyone* (London: SPCK, 2011), 1.

示録において、神（もしくはキリスト）が人（もしくは人々）を δοῦλος と呼ぶとき、「神と人との親密な関係」もしくは「所有」の意が強調される（2:20、7:3、19:2、5、22:3、6）。預言者（モーセさえ）もそう呼ばれる（10:7、11:18、15:3）。ここでは、ヨハネが「キリストのしもべ」と呼ばれる。固有名詞 Ἰωάννη は、黙示録の前書き（1:1）、七つの教会への挨拶文のはじめ（1:4）、黙示本体の終わり（22:8）とに置かれることで、黙示の受領者、またその証言者が誰であるのかが明確にされている。

この黙示の目的は、「すぐに起らねばならぬこと（δεῖ γενέσθαι）を知らせること」にある。動詞 δέω（「～ねばならない」）の文脈上のニュアンスは、「必然性」と共に「必要性」¹⁷を示す。すなわち、それは既に摂理の神によって計画され、宣告されたことであるゆえ、「起こらねばならない」事であり、同時に、誰も止めたり逃れたり出来ないという必然性を示す。また、「すぐに（ἐν τάχει）」という表現は、事態の緊急性を強調しつつ、朗読者と聴衆とに対し、示される神のこぼを耳を傾け、誠実に応答することを要求する。

2節は、1節の Ἰωάννη（「ヨハネ」）を先行詞とする関係代名詞節である。それを主語とする ἐμαρτύρησεν（「彼は証言した」）の目的語は、τὸν λόγον τοῦ θεοῦ（「神のこぼ」）と τὴν μαρτυρίαν Ἰησοῦ Χριστοῦ（「イエス・キリストの証言」）の二つで同格関係にある（「神のこぼ」[主格用法（subjective genitive）] = 「イエス・キリストの証言」[主格用法（subjective genitive）]）。すなわち、ヨハネが証言した「神のこぼ」とは、具体的には、イエス・キリストが証言したことをその内容とするということである。問題は、従属節 ὅσα εἶδεν（「彼が見たこと」）を何処に位置づけるかにある。それを関係代名詞節の ἐμαρτύρησεν（「彼は証言した」）の目的語（ヨハネの証言）とするか、二つ目の目的語 τὴν μαρτυρίαν（「証言」）の意味上の目的

¹⁷ Cf. BDAG; G. Osborne, *Revelation* (BECNT; Grand Rapids: Baker Academic, 2002), 51.

語（イエス・キリストの証言）とするか、もしくは、2節の関係代名詞節を含む ἀποστείλας（「使わした」）以下の分詞節を挿入句と見做し、1節の動詞 ἑσήμανεν（「彼は示した」）の目的語とするか。三つ目の解釈（「キリストが見たことを示す」）は、二つ目の解釈（「キリストが見たことを証言する」）と内容を同じくする。ここで黙示録における ὁράω（「見る」）の用法に注目すると、その主語のほぼ全てがヨハネである（黙示 1:19、20、4:1、5:1、6、11、6:1、5、8、9、12、7:1、2、9、8:2、13、9:1、17、10:1、5、11:19、13:1、11、14:1、6、14、15:1、2、5、16:13、17:3、6、8、12、15、18、18:1、19:11、17、19、20:1、4、11、21:1、2、22）。したがって、ὅσα εἶδεν（「彼が見たこと」）の主語をヨハネとすることは文脈に沿っているし、動詞 ἐμαρτύρησεν（「証言した」）の目的語が三つ並置されることで、啓示の内容がより具体的に示されていると考えるべきである。すなわち、ヨハネが証言したことは、「神のことば」→「イエス・キリストの証言」→「彼が見たすべてのこと」であったと。ὅσα εἶδεν（「彼が見たこと」）には、地上のイエスについての目撃証言も含むとの解釈もあるが¹⁸、文脈は支持しない。これは、旧約預言の表現形式の一つ（cf. アモ 1:1 とハバ 1:1）と観るべきである¹⁹。「証言」とは、「目撃した事実を語ること」であり、それゆえ信頼できる真理であることを物語っている。

5. 黙示の特質

黙示録の中に、「～は幸いである（μακάριος もしくは μακάριοι）」という祝福の言葉が七つある（1:3、14:13、16:15、19:9、20:6、22:7、14）が、1章3節は、その最初のものである。神は主権者また全知全能の神として祝福の道を人に示される。

μακάριος は、後続する分詞節の補語（εἰμι 動詞が省略）であるが、それ

¹⁸ Cf. S. Smalley, *The Revelation to John: A Commentary on the Greek Text of the Apocalypse* (Downers Grove: InterVarsity Press, 2005), 30.

¹⁹ Cf. Aune, *Revelation 1-5*. (WBC; Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1997), 19.

を「幸いなのは～だ」と解するには、厳密に言うとは主語と補語の関係が等位である必要がある (S=PN [convertible proposition])²⁰。「預言のこばを朗読する人と、それを聴いて行く人」(主語)は「幸いであること」(補語)の一要件を満たしているに過ぎない (S<PN) からである。もし主語と補語を入れ替えて訳すことが出来るとすれば、主語と補語が等位 (S=PN) であるか、もしくは補語の意味範囲が文脈上限定され、主語との関係性 (S ≍ PN) が予測される場合である。本論文では主語と述語の関係を保持しつつ倒置することにし、「幸いである、～である人は」と翻訳することを提案する。

預言のこば (= 黙示) を「朗読する人 (ὁ ἀναγινώσκων 単数)」と「聴く人々 (οἱ ἀκούοντες 複数)」、さらに、そこに書かれていることを「聴く (ἀκούω)」と「守ること (τηρέω)」とが対照されることで、この黙示 (神 → キリスト [御使いを介して] → ヨハネ → 教会) の内容が教会において重んじられるべきことが強調されている。この場合の「朗読」とは、礼拝における朗読を意図している²¹。

2 節で、「神のこば (ὁ λόγος τοῦ θεοῦ)」、また「イエス・キリストの証言 (ἡ μαρτυρία Ἰησοῦ Χριστοῦ)」と呼ばれたこばは、ここでは「預言のこば (οἱ λόγοι τῆς προφητείας) 複数」とされている。黙示録の終結部でも、それが「預言のこば」であることが確認されている (22:7、10、18、19)。ヨハネは自らが委ねられたこばの神的起源とともに、預言者としての召命を自覚していた²²。

新約聖書の記録によれば、イエスの時代 (ルカ 2:36)、また原始キリスト教会 (使徒 11:27～28、13:1、15:32、21:10～11、黙示録 22:9) には預言者と称される人物がおり、信仰共同体のなかで、重要な位置を占めていたことが分かる。彼らの主な役割は、将来の予告と警告 (使徒 11:27～28、

²⁰ 遠藤勝信「ヨハネ 17 章 3 節の談話的考察—主語・述語名詞の関係と解釈を中心に」『新約学研究』40, 23-39 頁。

²¹ cf. コロサイ 4:16、1 テサ 5:27。小河は翻訳に「礼拝において」を括弧付けで挿入『新約聖書翻訳委員会訳』。

²² cf. 黙示 1:9～20 の召命の記事は、旧約聖書の預言者たちのそれに類似している。

21:10～11)、助言(使徒 13: 1～3)、奨励(使徒 15:32)とにあった。黙示録にも、預言者たちの存在が覚えられている(10:7、11:10、18、16:6、18:20、24、22:6、9)。

ヨハネは旧約預言、殊に黙示文書(ダニエル、ゼカリヤ、エゼキエル、ヨエル、アモス、イザヤ)に細心の注意を払っている。それは、第二神殿期のユダヤ教文書に観られた特徴でもある。既に述べたように、原始キリスト教会において、「黙示」を受けた者の証言は重んじられていた(1 コリ 14:26～32)。これらの旧約預言の系譜に自らが立っていることを自覚しつつ、預言者ヨハネは諸教会に向けてキリストから示された黙示のこトバを証言する。

6. 終わりに

序文の、さらにその前書き(1:1～3)に、ヨハネはこの書の神的起源と共に、その特殊な性格と目的とを明確にしている。これは「イエス・キリストの黙示」である。それは、かつて旧約の預言者らが語ってきた終末に関わることで既に終末を迎えている(inaugurated eschatology)という意味では「今の事柄」であり、また「すぐに起こらねばならぬこと(ἃ δεῖ γενέσθαι ἐν τάχει)」としては「未来の事柄(futuristic eschatology)」を黙示の範囲とする。黙示録は、旧約預言(ダニエル、ゼカリヤ、エゼキエル、ヨエル、アモス、イザヤ)に依拠し、それらの頂点(ボウカム)を見つめている。教会はその地点から今を見つめ直し、如何に生きるべきかを学ぶことが期待される。

この黙示をキリストに与えたのは神であり、それゆえ「神のこトバ」(1:2)と呼ばれる。神のこトバは、謂わばバトンリレーのように慎重に丁寧に手渡されて行く。はじめに神はご自分のこトバをキリストにお与えになった。キリストはそれをご自分の使いを介してしもべヨハネに示し、ヨハネは諸教会に証言する。さらにそれは諸教会に書き送られ、朗読する者と聴く者、すなわち礼拝共同体によって受け止められることが期待されていた。

黙示録において、「終末の接近」という主題は繰り返し取り上げられる(2:16、25、3:11、20、6:11、10:6、11:2～3、12:6、12、17:10、22:6、7、10、12、20)。第二神殿期のユダヤ教文書の終末論には、「やがて」と「いま」、あるいは「いまだ」と「すぐに」という、一見矛盾する二つの視点の強調が観られる²³。例えばそれは、1テサロニケ(すぐに)と2テサロニケ(いまだ)の終末論に対応する。「いまだ」という強調は、「落ち着いて」という奨励として、「すぐに」とは「目を覚まして」という警告として。終末が間近である「いま」(黙示1:1、3)、教会は落ち着いて神のことばに耳を傾け、目覚めを与えられつつ祝福に至る道を選ぶようにと励まされる。

文献表

- Aland, K., (eds.) *The Text of the New Testament*. Grand Rapids: Eerdmans, 1989.
 ———, *Novum Testamentum Graece 28th*. Deutsche Bibelgesellschaft, 2012.
 ———, *UBS 5th Revised The Greek New Testament: A Reader's Edition*. German Bible Society, 2014.
 Aune, D., *Revelation 1-5*. Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1997.
 Bauckham, R., *The Theology of the Book of Revelation*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
 ———, *The Climax of Prophecy: Studies on the Book of Revelation*. Edinburgh: T. and T. Clark, 1993.
 ———, *The Jewish World Around the New Testament*. Grand Rapids: Baker Academic. 2008.
 Bauer, W., (eds.) *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*, 3rd Edition (Chicago: University of Chicago Press, 2001). 本論文では BDAG と略表記。
 Beale, G., *The Book of Revelation*. Grand Rapids: Eerdmans, 1999.
 Boring, M. E., *Revelation: Interpretation A Bible Commentary for Teaching and Preaching*. Louisville: Westminster/John Knox Press, 1989 (入訳『ヨハネの黙示録』、日本基督教団出版局、1994年)。
 Clines, D., (eds.), *The Dictionary of Classical Hebrew, vol. VIII* (Scheffield: Scheffield Phoenix Press, 2011).
 deSilva, D., *Seeing Things John's Way: The Rhetoric of the Book of Revelation*. Louisville: Westminster/John Knox Press, 2009.
 Elliger, K., *Biblia Hebraica Stuttgartensia*, Amer Bible Society, 1990.
 Joüon, P., *A Grammar of Biblical Hebrew: Part Three- Syntax, Pradigms and Indices*. Roma: Editrice Pontificio Instituto Boblico, 1991.

²³ Cf. Resseguie, *Revelation of John*, 63.

- Kautzsch, E., *Gesenius' Hebrew Grammar* (2nd ed.). Oxford: Clarendon Press, 1985.
- Koch, K., *Ratlos vor der Apokalypitik: Eine Streitschrift über ein vernachlässigtes Gebiet der Bibelwissenschaft und die schädlichen Auswirkungen auf Theologie und Philosophie*. Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus G. Mohn, 1970.
- Osborne, G., *Revelation*. Grand Rapids: Baker Academic, 2002.
- Rahlfs, A., (eds.) *Septuaginta: Id Est Vetus Testamentum Graece Iuxta Lxx Interpretes*, Amer Bible Society, 2006.
- Resseguie, J. L., *Revelation of John: A Narrative Commentary*. Grand Rapids: Baker Academic, 2009.
- Smalley, S., *The Revelation to John: A Commentary on the Greek Text of the Apocalypse*. Downers Grove: InterVarsity Press, 2005.
- Wallace, D., *Greek Grammar Beyond the Basics: An Exegetical Syntax of the New Testament*. Grand Rapids: Zondervan, 1996.
- Wachtel, K., (eds.) *The Textual history of the Greek New Testament: Changing Views in Contemporary Research*. JBL, 2011.
- Williams, R., *Hebrew Syntax: An Outline* (2nd ed.). Toronto: University of Toronto Press, 1982.
- Witherington III, B., *Revelation*. Cambridge: Cambridge University Press, 2003.
- Wright, N.T., *Revelation for Everyone*. London: SPCK, 2011.
- 荒井献編『新約聖書外典』、講談社、1974 年。
- 遠藤勝信「ヨハネ 17 章 3 節の談話的考察—主語・述語名詞の関係と解釈を中心に」『新約学研究』40 号 23～39 頁、2012 年。
- 佐竹明『ヨハネの黙示録』(上・中・下巻)、新教出版社、2009 年。
- 新約聖書翻訳委員会訳『ヨハネの黙示録』、岩波書店、1996 年。
- 日本聖書学研究所編『聖書外典偽典』、教文館、1975～1982 年。
- 共同訳聖書実行委員会訳『新共同訳聖書』、日本聖書協会、1987 年。

キーワード

ヨハネの黙示録、序言、黙示、啓示、終末論、ライン分析

πῶς, Ἀποκάλυψις, ἀποστέλλω, ellipsis